

Be the Top!

sbue

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

All you need is ……

目次

Round 1	足枷	1
Round 2	錆びないモノ	11
Round 3	Courage	18
Round 4	はじめの一步	29
Round 5	New Challenge	38
Round 6	ファイトスタイル	48
Round 7	必殺技	56

Round 1 足枷

歳をとるにつれ、大人になるにつれて現実というものが襲いかかる。誰にでも。ただ一部の出来るやつを除いて。少なくとも自分はその他の大勢であることに変わりないが、少しは反抗的な態度をとりたくなる時があった。けれど二十歳を過ぎると、現実というあの剣が何処かに刺さったままである。抜けずに、いや、最早抜こうともしなかったのかもしれない。

往々と行き交う人々を眺めていた。春だからであろう、就活に成功したのでであろうバッチシとスーツを着こみ希望に満ち溢れた雰囲気を出している新社会人がやたらと目についた。

羨ましい、と思わず彼は呟いてしまう。

建設現場のバイトの昼休み。時間は二十分も残っている。何とも言い難い感情が彼を襲った。

一体いつからであろう——いつから自分自身に諦めがつくようになってしまったんだらうか、と。

夜、仕事が終われば彼は帰路につく。普段なら晩御飯を作るのだが今日だけは気分が乗

らなかつた。

コンビニ袋をプラプラと揺らし、河川敷に沿って歩いてゐる。ただ何も考えずに。今漠然とした将来に対して頭を働かせることを拒絶したのだ。

中途半端というものはやはりいいものではない。下手な希望を持つくらいなら初めから何も抱かないほうが自分の為にもなる。諦めなければ必ず努力は実るとかいふけれど、そいつらは自分と同じような立場ならきつと、「努力は必ずしも実るものではない。ただ——」とまた出鱈目なことを言うのだ。自分の尊厳や体裁を保つ為に。

この道を歩くのは一体何度目であろうか。親元を離れここに越してきてから随分と時間が経ってしまった。辛うじてあつた新鮮味も今ではすっかりと消えてしまった。家とバイト先を延々と行き来する何も面白みもないゲームをやり続けたい者はきつと何処かに異常があるのだ。きつと。

「本当にダメな奴だなあ、俺は」

まただ。

辺りが既に暗くなつてゐるといにも関わらず、道を往復して走つてゐるフードの男がいつも通りの時間に現れた。察するに何かスポーツか、将又格闘技でもしてゐるのであろう。いや、恐らく格闘技に違いない。時折止まりながら拳で空を切るところを見るとそうに違いない。

確か6ヶ月以上だ。

ここに来てはじめての頃は気にも留めなかったが、恐らくずっとここでそのフードを被った男は居たに違いない。

きつと彼は今の自分と違い、明確な目標の下必死に努力しているのだ。それが叶うか叶わないか別として、逆風に耐え一步、また一步踏みしめるあの辛さは思い出そうとしても、その記憶すら美化されている事実に驚きを隠せない。人は都合の悪い記憶とやらをあの頃は良かったなどと考えさせるように書き換えてしまうようだ。

家に着くと、疲れがどつと押し寄せる。

慣れっこなのに。

食欲も無かった。

これが夢であつて欲しい。長い夢であると。

そして、彼は眠りについた。

朝を迎えた。そそくさと着替えを済まし、またあの仕事場へと向かった。いつも通り仕事をこなせばそれだけでいい。ただそれだけでいいんだ。

昼食の休憩時間に入った。

皆でコンビニで買った飯を食べるのが嫌いだった。何故だか嫌いだった。理由は恐らく、昔彼らのような人種を見下していたからなのだろう。現在でも見下している。

今度は自分自身を含めてだ。

空がオレンジ色に染まる頃、ようやく一段落つき、今日の仕事が終了した。

年上の方々に頭を下げ、仕事場を後にした。

「たまには公園でもよるかな」

河川敷とは反対の方向に足を運んだ。あまりこつちの方面には行ったことがない。そもそも行く必要もない。が、若干弱った心を癒すには充分である。心の安寧を保つ為には何が必要かを考えたことは無いが、家でじつとしてゐるよりか、外に出て足を動かしているほうが幾分かはましなのである。それは過去の経験から学んだ事なのだ。昔は勉強の合間に――。

久しぶりの商店街はどこか面白かった。やはりどんな場所でも商店街とは活気があ
るべきだと思う。ここですらどんよりとしていたらこれこそ心の精神衛生上よろしく
ない。これ以上自分の精神をすり減らしたくないのだ。

商店街を抜け、少し歩くと、そこには公園がある。

近くで弁当を買い、公園で食べよう。それがいい。それがいいんだ、今は。そうだ、た
まには奮発して高めの弁当でも買おうか。それなら一番高いやつがいい。高ければい
いんだ。味はきつといいに違いない。高いんだから。

弁当を買い、公園のベンチに腰を降ろす。

時刻は六時半。さつきまでいたのであろう小学生たちはすっかりと家に帰ってしまっていた。十月もいよいよ冷え込む頃、今日は少しだけ温かった。運が良かった。

弁当を膝に乗せ、食べようとしたまさにその時、事件が起こる。

「そこから降りて下さい！」

突如として聴こえてきたのが女性の声であった。振り返ると、そこには不良達と女性が花壇の側で揉めているようであった。暗くてハッキリと分からなかったが、不良は花壇の内側にいるようである。

彼は暴力とは全く無縁の所にいたという訳では無い。ただ、少しだけ格闘技をしていただけであり、特に得意ではなかった。ただそれだけだ。

巻き込まれるなら、いつそただ傍観しているだけでいい。そうすれば何も被害を被らないのだから。

逃げるのか。

また――。

いや、いつその事逃げようか。自分にとってあの人はどうなろうと関係なんて無いだろう。大体ガラの悪い六人に怒鳴るあの女性が悪いんだ。分かるだろう。女が力で負けることぐらい。分かるだろう。声を掛けちゃ被害を被ることぐらい。分かれよ。皆敢えて声を掛けなかったことぐらい――分かれよ！。

そうだ。そうしよう。この場を離れよう。そうすれば逃げたことにはならないじゃないか。ただ自分はベンチから腰を上げ、他の場所に移動すればいいだけのはなじやないか。そうだ。あの女性が悪いんだ。不良にわざわざ声を掛けた、あの女性が悪いんだ。

距離が徐々に詰められていく。

女性が辺りに助けを求めている。

そのサラリーマン逃げやがった。高校生も中学生も逃げた。仕方ないよな。面倒だもんな、あんな連中と絡むなんてろくなことがない筈だもんな。

囲みやがった。

男達の笑い声が聞こえた。さしずめさつき威勢は——とか言っているのだろう。

あ、一人が女の子に被さりやがった。

小さな悲鳴が聞こえた。

動画でしか見たことないな、こんなの。

だんだんと抵抗しなくなったな。

男達が女性に群がり始めた。

うわあ、気持ち悪い——

……あいつらが？

それとも俺か？俺自身か？

大体——

あれ、今日が合ったのだろうか。

合ったのか。

いや、気のせいに……

助けて——

やめろよ……今にも泣きだしそうなそんな表情で訴えかけてくるなよ……。原因を
作り出したのは——作り出したのは——

俺は
↓
!

俺は
⋮
⋮
⋮

彼は駆け出していった。

「お、お前ら！その女性を離せ!!」

恐怖で足がすくんでしまう。喧嘩なんてしたことが無いし、したくもない。けれど、今、逃げてしまつては過去の自分と同じじゃないか。いや、過去の自分の方がよつぽど果敢に立ち向かつていたじゃないか。

間に割つて入ると、男達はニヤリと笑を浮かべていた。それは、たった一人の優男が俺たち相手に何が出来ると物語っている。

「ここで逃げてしまえば本当に俺はどうしようもないクズになつてしまふから……少なくとも……俺は、俺自身に諦めをつけたくないから——」

思わず声が漏れてしまった。

不良達はケラケラと笑っている。

そりやそうだ。こんな情けない言葉、自分自身でも笑つてしまひしそうだ。けれど、その言葉の真意を知るものは自分以外知るところはない。

まだ、自分自身を信じたいから——だから俺は留まらず逃げないことを選択したのだ。嘗て自分がいた場所から抜け出せなかつた状況にいたように。

「あなたは早く逃げて——」

そう言いかけた刹那、腹部に激痛が走る。

その数秒後には地面に伏せている自分がいた。ただ幸いな事に、女性の姿はそこにはなかった。

ちやんと大通りに出れたのであろうか。

しかし、そう考えている暇は最早残されてなどいかなかった。

男達に取り囲まれた頃にはもう遅かった。それはまるで子供が気に入らないオモチャを壊す位の勢いで、何度も何度も蹴らては殴られの繰り返しであった。徐々に鉄の味が染み渡り、意識が朦朧とし始めた時、ふと男達の猛攻はピタリと止まった。

何か声のようなものが聴こえた気がした。

ああ、そうか。遂に意識を失ってしまったのであろうか。妙に温かかった。あれ、さつきまで自分は何処にいたのだろうか。そうか——殴られて——
気が付くとそこには天井があった。

Round 2 錆びないモノ

そこには見知らぬ天井があつた。不良達に暴行を受けたことだけは身体がキチンと記憶しているのだが、それよりもここは何処だろうか。それ以降の記憶がゴツソリと抜け落ちてしまっているのだ。

「よっ、起きたか!」

突然の声に驚いてしまった。

振り返ると、そこには男性が菓子パン片手に持った男がいた。察するにこの人が自分を助けてくれたのであろう。——とするとこの人が不良を……?

「お、おはようございます……とございますか——その……」

「とりあえず大きな怪我は無くてよかつたな。ぎりぎり間に合つたぜ」

「すみません。恐らく助けて頂いたのだと思うのですが、記憶が全く無くて」

「いいってことよ」

まさかとは思うが、あの不良達を片付けたとは到底思えないほどの優しそうな人であつた。背丈は大体同じくらいだ。しかしよく見るとガタイは自分とは比べ物にならないほどしつかりとしていた。

差し出された菓子パンを頬張ると、口に激痛が走る。薄れゆく意識の中、鉄棒を舐めているような感じがしたと思っていたが、まさかこれほどまでのものとは思ってもしなかつた。これが口の中を切るといふことなのか。

苦痛に顔を歪ませていたからであろう、その優しそうな男は笑いながら水を差し出した。

「結構痛いよな、口ん中がキレれたらよ」

「ええ、本当に……。というかこんな痛いですね」

「まあ、それが勇気を出して闘った勲章でもあるんじゃないか？」

「……？」

「どうやらこの人は、自分が助けたあの女性にたまたま助けを求められたらしい。一先ず女性が逃げられたことに安堵したとともに、その人には礼を言わなければならぬようだ。」

「その、あなたは大丈夫だったんですか？」

「ん、ああ、全然大丈夫さ。ついでに俺は木村ってんだ。こう見えてもボクシングやってんだ」

ようやく理解した。

木村はボクシングをしていたからある程度そこら辺の不良に対応出来たのだと。そ

してプロライセンスを所持しているのだという。そう、いわゆるプロボクサーというやつだ。

本物のボクサーに出会ったことはこれが始めてである。

「自分は佐伯といいます。今日は助けて頂き本当にありがとうございます」

「いいってことよ。それよりも、勇気あるんだな、佐伯は。普通ならあんな不良共に立ち向かうなんて出来っこないぜ」

「いや、ただ自分が許せなかったから……。勇気なんてそんな立派なものじゃありません。ただ自分の為に彼女を助けただけに過ぎませんから」

「自分の為——か。まあ、でもそれでも人を助けたことには変わりないさ。大体自分の為つつつても早々助けにいけるもんじゃねえよ。賞賛に値するぜ」

自分の為に彼女を助けた——助けたかったと言えば助けたかったが、実際に助けるつもりは全然無かったのかと言えばそうでもない。けれど、咄嗟に身体が動いたのは男が女性の胸ぐらを掴んだからであつて……。そう考えるとただ助けたかったからなのであろうか。

一度逃げてしまうと、もう歯止めが利かなくなること俺は知っている。嘗て自分が逃げてしまったように。

佐伯があの場合で思い出していたことは、過去の自分である。あの場合ですら逃げて

しまうといよいよ自分は人間としても駄目な奴になってしまふ、彼はそう直感したのだ。

「まあ、今日は夜も遅いし、家で泊まっていきな」

「そ、そんな！悪いですよ！」と言い立ち上がったその時、右太ももに鋭い痛みが走る。姿勢を崩しかけたが、何とか持ちこたえた。しかし再び立ち上がろうと試みるが、どうも出来そうになかった。相当深刻とは言えないがそれなりのダメージを負っていたことに佐伯はようやく気が付いた。

「ああ、言わんこつちやない。さささつ、とりあえず寝た寝た。明日は病院に連れて行くからな、覚悟しとけよ。じゃ、おやすみ」

翌朝、近くの病院へと向かった。検査の結果は打撲と、筋を痛めているとのことである。言い渡されたのは、2、3日の入院とその後3週間バイト等の類は一切禁止であった。

入院して早くも4日が経過し、5日めによろやく家に帰ることができた。入院中も木村は1日おきに覗きに来てくれていたので、本当に何から何まで申し訳ないな、と佐伯は感謝する以外他になかった。

自宅安静から2週間が経過した11月の終わり頃、寒さもあつて家から全く出ない日が続いていたが、流石の佐伯でもいつまでもダラダラしてはいられないと考えたのである。

コートを羽織り、ただ当てもなく繁華街へと駆り出した。身を切り裂くとはまさにこのこと。あまりの寒さに顔を歪めるが、まだ11月。寒さにはめっぽう弱い佐伯にとって、冬とはまさに最悪の季節である。

ふと、あることを思い出した。

木村がプロボクサーだということ。

辺りを散策すると、駅前に大きな書店があつた。贅沢をしなければ困ることは無いほどの貯えはあつたので、ボクシングについての本を5、6冊とその他トレーニングや格闘技に関する論理系等々様々な本を買い込んだ。ボクシングの基礎から絶対に使わないであろう難しめの言葉で埋め尽くされている本まで実に様々である。

本を読むのは何年ぶりだろうか。最後に読んだ本が確か、コナンドイルの探偵もの小説だった。それからたいして新聞も読まなかつたし、テレビも特に見ることもなかつた。よく良く考えれば、自分は一体何をしていたのだろうか。

「へえ、ボクシングってただ殴り合うだけの格闘技じゃないんだな……」

ただ相手を殴り倒す事がボクシングの全てだと考えていた佐伯にとって、これはあま

りにも興味をそそられる内容であった。闘い方にしろ実に様々で、距離のとり方や様々なファイトスタイルの長所短所等々上げればキリがない程ボクシングについて無知であったことを思い知らされるのであった。

「ボクシングか……」

何かを求めていた。あまりにも漠然とし過ぎていた何かを、ようやく見つけたような気がした。

しかしそれは単なる思い過ぎしなのかも知れない。

たまたま木村というプロボクサーに助けられたから。本を読みボクシングについて詳しくなったから。ただ単に身体を動かしたかったから。

理由は至つて単純なものなのかもしれない。

けれど、一筋の蜘蛛の糸が遥か彼方からようやく垂れてきてのだ、と佐伯は確信する。きっと自分自身を変えるにはもう、これしか無いのだと。

逃げることににはもう疲れてしまった。逃げることで自体に嫌気が差してしまった。これ以上自分を、自分自身を偽るのはもうゴメンだ。

過去を変えることは不可のだ。

未来しかない。

自分の未来をこの手で掴みとるしかない。

俺は出来るのか？

無理なのか——いや、

やるしかない……

食らいつくしか方法はないんだ……

例え不可という烙印を押されようが……押されようがやるしかない……やるしかないんだ——！

12月。もう残り14日。2週間で年を越してしまうそんなある日。佐伯は着々と準備を進めていた。

少なからずともある程度は勉強だけは出来ていたため、プランニングは実にお手の物である。

独りで努力をする事の辛さは重々承知していた。二度も失敗した。だからこそ今回は、成功させる以外退路は残されていない。2度も選択を誤ってしまった。だからこそ、失敗を経験してしまった者にしか理解し得ない事だ。ある筈なんだ。

寒空の中、拳を握りしめる。

Round 3 Courage

口では気前のいい言葉を幾らでも言うことが出来る。理想の自分を思い描き、現実逃避することも自由だ。偽りで武装し、他者を欺くことも容易だ。自分を肯定、否定、美化するのも全てが。

純粹に強くなりたければ身体を鍛えればよい。知識人になりたいのならスポンジのごとく情報を吸収し、学問に没頭すればよい。より高みを目指したければ何事にも動くことのない屈強な精神を育めばよい。

本当の意味で己を統制するということは、不可能なのかもしれない。世の中にはあまりにも汚れているのだから。

けれど、人間が人間である所以は、その欲望に打ち勝つ術をもっているからなのではないのだろうか。

身体中が痛む。けれど痛くない。

息があがっていたが、佐伯は歩みを止めなかった。身体が痛むのは確かなことである。けれど、それは自分が努力した証でもあるからだ。

12月もいよいよ終わりを迎えた29日。あと数日で年を越してしまう。佐伯が木村と出会い約3ヶ月弱の月日が流れた。

11月を境に、佐伯が木村と会うことはほとんどなかった。未だに自分がボクシングをしたいという旨を伝えていなかった。まだ11月なのでいいか、と先延ばしをしていた結果もう年の瀬になってしまった。

佐伯は少し不安であった。

もしも、木村に自分もボクシングがしたいと申し出たら一体何を言われるのかと。恐らく拒絶されることはないだろうが、変に気を遣わせてしまうことは確実である。

うかうか考えている暇があれば、すぐに木村の所へ向かうべきなのだが、ここにきて自分がチキンであるということを見つけてしまった。呆れてしまう。

「はあ……何だかなあ」

とりあえず来年の一月に会いに行こう、と心に誓い、ただ我武者羅に前へ前へと走り続けるの佐伯であった。

そして12月31日を迎えた。

その日の仕事はいつもより早く、4時半の超早上がりであった。この時期になると何処も彼処も似たようなものである。ただ繁華街や都心部で働いている人達は本当に大変だなと実感させられる瞬間でもある。

明日は1月1日。

1年が第一日目。

今日普通に帰り、いつも通り朝を迎える事は何だか勿体ない。多少しんどかろうが、明日が年の始まりだと心持ちが違うのだ。

仕事場に深々と頭を下げると、佐伯は家とは逆方向である駅の方へと向かって歩いた。

殊更今日は人が多かった。何時もよりも家族連れやカップルが倍以上いるに違いない。愛を語らいながら、家族皆で和気あいあいと、友達や職場の皆でワーツと盛り上がり年を越すのだろう。皆思い思いに。道行人々が全て幸せな表情を浮かべているように思えたのはきつと気のせいではない。

両の手のひらにハーツと息を吐く。

吐息は白く濁っていた。

街は汚れている。

吹き荒ぶ風が身体に染み渡る。

たまには感傷的な雰囲気にも身を委ね、悲観的になるのも案外いいかもしれない。さながら映画の主人公のようだ。なぜだか楽しいのだ。この雰囲気には酔いしれることが。

「そろそろ時間か。長居しすぎたな」

腕時計を確認すると、時刻は12時半を回っていた。二冊目の本を読み終えた所なので、店を後にするには丁度よかった。

後30分だ。

今年はどのような年だったのだろうか。

佐伯は思い返す。

ただ何も考えずに生きていた。目的なんてものがあるはずも無かった。人生はまだ長いんだからとか、言われることもあった。けれど、それを二十歳の自分自身にもそう言うことが出来るのだろうか。老いてから初めて言えるからであって、暗闇から抜け出すことが出来たからその様な若者にとつては無責任とも思わせる事が言えるのだ。

自分は歩み続けていけるのか。

暗闇から抜け出せるのだろうか。

考えれば考える程きりが無い。不安材料があまりにも多過ぎるのだ。

気が付くと川原の土手に腰を下ろしていた。

「佐伯だよな」

肩をポンポンと。振り返るとそこには木村がいた。

佐伯は思わず声を上げてしまう。まさかこんな所で、しかもこんな時間帯に出会うな
ど思いもしなかったからだ。

「あ、お久しぶりです」

「元気にしてたか？」

「ボチボチです」

「そうか」と木村は笑顔で応えた。

それにしてもこんな時間に何をしているのだろうか。差し詰めロードワークと言ったところであろう。着ている服は機動性と断熱性を兼ね備えたランニングウェアを着込んでいるからだ。だが少しだけ、どこかお酒の匂いにするのは気のせいだろうか。

「木村さんはロードワーク中ですよ」

「ああ。今さっきジムの野郎どもと飯食ってきてよ。帰って寝ようかと思っただけ、なんか走りたい気分になつてさ」

「キツくないんですか？ すみません、当たり前前の質問して」

「ハハハ。ふつーにキツイぜ」

「ですよ」

「でも、幾ら飲んでも毎日走つてりゃあ、その習慣を止めちゃうなんてなんか負けた気がしてよ。んなことよりも佐伯はこんな所で何してるんだ？」

「ああ、ええつと——」

ただ疲れているから。いや、実際そこまで疲れてはいない。精神的にも、死ぬほど追

い詰められているのかと問われればそうでない。漠然とした不安がある。ただそれだけのことなのだから。

「ぼーっとしてただけです」

「そうか」

「後少しで年が明けけるなあ、って」

「そうか……ちよつと隣邪魔するぜ」

後10分程度で年が明けける。

2人はただ黙っていた。けれど、佐伯別段気まずくもなかった。寧ろ誰かと共に年を越せるのか、と内心喜んでいたくらいである。

来年は一体どうなるんだろうか。

またイタズラに時間を浪費する日々を過ごすだけなのだろうか。それとも何か有意義な時間を過ごせるのだとでもいえるのだろうか。

何れにせよ行動を起こすのは自分だ。人生をより良い方向へと舵を切るのも。全ては自分次第である。

「あの、木村さんは——プロボクサーなんですよね」

「ああ」

「ボクサーを目指したキツカケってありますか？」

「へへッ、もちろんあるぜ。ちよつとだけ長い話になるけどよ——」

嘗て木村は不良だった。同じジムにいるもう1人とコンビを組み、ここらでは喧嘩最強の2人だとも言われていたそうだ。

ただある1人の不良だけには勝てなかった。

その事実を暫くの間彼らは認める事が出来なかった。唯一自信のあつた喧嘩において完敗に終わったからだ。当時の彼らにとってはあまりにも衝撃的だったのであろう。

再び彼らは喧嘩を挑んだ。

しかし負けてしまった。

けれど、今回は違っていた。

彼らはその男がボクシングジムに通っていると分かると、すぐさまそのジムに入会した。その男に一発ぶちかます為に。文字通りの死ぬ気で毎日毎日ボクシングに打ち込んだそうだ。ただその人の顔面に一発ぶちこむ為だけに。

しかしいつしか彼らはその男を目標に掲げボクサーを目指したのだ。彼のように強くなる為に。

「そ、そんな過去が……。ていうかその鷹村って人は木村さんより強いんですか!？」

「めっちゃ超強いぜ。俺なんか一捻りさ」

「木村さんが一捻りだなんて……。信じられませんよ」

「あ、後2分で年が明けるな」

「もう今年が終わるんですね」

「そうだな」

大事なことを言い忘れていた。本当に大切な事を。木村に自分もボクシングをやりたいと言う事を。

告白するつもりではないが、まさにそれくらいの緊張がある。悪いことを告白するつもりでもないのだが、何だか叱られそうな気がして堪らない。

けれど今がチャンスなのだ。

これを逃す訳にはいかない。

「あ、あの」

「んん?」

「ぼ、ボクシングって面白いですか?」

「ああ、おもしろいよ」

「痛くないんですか?」

「まあ、痛い時もあるわな」

「ボクシング……」

「んん?」

木村は首を傾げていた。

「いや、その——じ、自分にもボクシング……って出来そうですかね……？」
言ってしまった。

遂に言ってしまった。

暗がりの中、木村の表情を読み取ることは出来なかったが、どうやら怒ってなさそう
だ。まあ、流石に怒ることはないのだろうけど。とすると、困惑してゐるのではないの
だろうか。素人が突然ボクシングをやりたいなんて、そりゃあ困るに決まってる。誰か
に許しを得てするものでも無いのだから。ああ、言わない方が良かったのか。

佐伯は様々なシチュエーションを想定していた。

その間僅か5秒である。

しかし佐伯の予想は大きく外れることとなる。

木村は突然腹を抱えて笑い出したのである。

「えーつと……」

「い、いやあ、ごめんごめん。ただちよつと思ひ出してよ」

「思ひ出した……んですか？」

「似たような事があつてな。鷹村さんから聴いてあくまでも想像しか出来ないけどよ。
きつと一歩も鷹村さんに同じことを言つたんだろうな、って」

「は、はあ………?」

「まさか俺が似たようなことを言われるとは思ひもしなかつたぜ」

「あ、えつと………」

木村は呟いた。

運命みたいだな——

「1月5日だ」

「え」

「その日の午後5時に鴨川ジムって所に来な」

「は、はい!」

「じゃ、俺はロードワークに戻るわ。今年も………ていうか、今年からか。今年からよろしく頼むぜ」

1月1日、午前1時15分。

身を切り裂く寒さが気持ち良かった。

まだ心臓が大きく鼓動している。

言ったのだ。遂に言ってしまったのだ。

案外呆気ないものだった。

俺にも目標が出来た。

前に進むだけだ。どれだけ殴られようが、辛い事が待ち受けていたとしても、俺はただ折れずに歩みを止めなければいい。何があろうとも絶対に越えてみせる。例え誰もがなし得ないそんな困難なものが待ち受けていようが。

俺に才能が無いことは確かだ。恐らくどこまでいってもきつと並に違いない。けれど、努力することだけは他の誰にも負けられない。それだけは俺が絶対に勝たなくちゃならない分野なんだ。半端者だから分かる。努力の大切さが。半端者のだからこそ分かる。何処に壁がそびえ立っているのかが。

Round 4 はじめの一步

鴨川ジムは遠くないが、近くもない。

徒歩十五分程でようやく到着した佐伯であるが、不安な表情を浮かべていた。遅刻したわけでもない。ただ、誰にでもあることだが、新たな一步を踏み出すことを躊躇う者が多いことは事実であろう。

誰しも変わりたいと願う。けれど、それが叶うか叶わないかは神のみぞ知るところである。しかし、その一步が持つ価値は計り知れない。

ジムの目の前で立ち止まっていると、ドアが急に開いた。中から、木村が「よつ」と現れた。

「お久しぶりです。というか、明けましておめでとうございます」

「久しぶりだな。明けましておめでとう。とりあえず中に入れよ」

初めてボクシングジムという所に入った佐伯にとつて、あるもの全てが新鮮なものであった。ミット打ちや、スパarring、シャドーボクシングをするボクサー達はあくまでも想像の中の人達であったからだ。

中でも佐伯の目が捉えたリーゼントの大男は、爆音を立てながらサンドバッグにパン

チを繰り出していった。

「す、すげえ……。これがボクシングジムってやつなのか……!!」

「割と汗臭エだろ」

「あ、いや、そんなことは……。」

「そのうち慣れるさ。変な話だけどき、心地よくなるんだよな。この臭いや雰囲気含めてな。」

「心地よく、ですか」

「こればかりは説明のしようがねえぜ」

「いえ、何となくわかるような気が」

すると、リーゼントの大男はサンドバッグを打ち終えたのであろうか、肩にタオルを下げてこちらへと歩み寄った。

大男は不思議そうな顔で佐伯をじっと見つめている。

「あ、鷹村さん」

「コイツが例の新人ってやつか、木村」

「そうっすよ」

「この時期に入門ってのも、なんか珍しいな」

「いいじゃないっすか、丁度。新年だし、キリがいいし」

リーゼントの大男は鷹村というようだ。

佐伯を舐め回すような鷹村の視線に、ひどく緊張したが、直感的なものが働いたのであろうか、彼はそんなに悪い人ではなさそうだなと佐伯は考える。

「は、はじめまして！佐伯亮太と申します！ふ、ふつつかものですが、こ、これからも未永くよろしくお願いします！」

刹那、沈黙が走る。

が、数秒後、佐伯の言葉を聞いた人達の笑い声で鴨川ジムは覆い尽くされた。

緊張のせいで、挨拶の言葉を完全に間違ってしまったが、まあ、新入りのつかみとしては申し分内ほどの上出来であろう。

ゆでダコのように顔を紅く染めてしまった当の本人である佐伯は穴があれば入りたいうようであったが。

「ナイスつかみだったな！」

「や、やめてください……」

あれから二十分が経過した。

鷹村はロードワークに行き、佐伯はジムの隅っこの方で各々が格闘する様を眺めていた。

バチバチと縄が跳ねる音に、周期的になゴングの音。ミットがパン、パン！と立てる

音に、シャドーボクシングをしている人が奏でるキュツ、キュツといった独特の音。

ジムに来てから気が付かなかったが、ここでは色々な音が溢れていた。うるさいとい
うか、寧ろ自分自身を奮い立たせるような、そんな音だ。

「どうよ、これがボクシングジムってやつよ」

「木村さん」

「ん、どうした？」

「なんだか分かった気がします。臭いとか雰囲気とか、説明のしようがないんですけど

……その——」

「ああ、分かるぜ。言わんとしていることがよ」

「俺も、ボクサーに……」

厳しくもあり、美しくもあるその険しい道に、佐伯はその一步を踏み出そうとしてい
た。佐伯が拳をギュツ握りしめる様を、木村はどこか微笑ましそうに眺めていた。

「さてと。とりあえず今日は軽くスパーでもしようか」

「はい！……え、す、スパーってその、スパーリングってやつですか？」

「おうよ！」

「いやいやいや、無理ですって！いきなりグローブ握って、闘えとか無理ですよ！」

「大丈夫大丈夫。スパーリングつっても、条件付きのスパーリングだからさ」

「じよ、条件付き……?」

「丁度今帰ってきた鷹村さんがスパアの相手さ」

「いやいやいやいや、条件もクソもないですよ! あんな大男とスパリングなんて無理ですって!」

佐伯の脳裏に浮かぶ光景は、鷹村の鬼のような猛攻である。常人が喰らえば即KOであろう攻撃を受ければどのような結果になるのかなんて決まっている。吹っ飛んだ上に失神。運が良くても確実に吹き飛ばされるに決まっている。

が、流石に条件付きのスパリングであり、その条件というのが、鷹村は攻撃をしない、という内容である。

それなら恐れることはないだろう、と木村は万遍の笑みで言い放った。

「よしつ、それじゃ、はじめるとすつか」

リングに初めて上がると、広いようで以外と狭い事に気が付いた佐伯である。そして鷹村が放つプレッシャーが更に佐伯の視野を狭めていた。

そしてゴングが鳴り響く。

「さ、御手並み拝見といこうか」

「お、お願いします！」

ここで立ち止まっても意味がない。

佐伯は意を決し、そのボクサーとしてのはじめの一步を踏み出したと同時に駆け出した。

依然として鷹村はガードを軽く固めたまま、リング向かい側——リング隅で構えている。

佐伯は思い返す。

ボクシングには様々なパンチがあることを。肘で打つフックに、捨てパンチと呼ばれるボクシング特有のジャブ。そしてストレートパンチに、顎を抉るようにして放つアツパーパンチ。

佐伯が選択した第一打はジャブであった。

「シュツ——シュツシュツ！」

「おお、やるじゃねえか……が。まだまだ甘ちゃんだな」

「う、ウソだろ……!?!」

佐伯のジャブは鷹村にカスリもしなかった。

驚くことに鷹村はあの巨体でただ上半身を左右に振り、全てのジャブを見抜き、完璧

に避けきっていたのだ。

誰しもボクシングの真似事はした事があるだろう。高校生や小中学生の頃に。しかしそれでも自分が放つパンチとやらは相手に当てる事が出来たはずなのだ。

それなのに今目の前で起きているこのおかしな現象をどう説明すればよいのだろうか。

佐伯は顔を歪めたが、同時に感動した。

ボクサーとは想像以上に凄いのか——ボクサーというやつは！

佐伯は本に書いてあったパンチを一通り鷹村へと放った。ストレートにフック、アツパーパンチ。だがどれも全てがまるで鷹村を嫌うかの如くただ虚しく空を切るだけであった。

3ラウンドに差し掛かるが、鷹村のキレはラウンド数が増える事に増すばかりであった。自分の可動域を知り尽くした合理的な避け方や立ち居振る舞いは科学的であり、鋭い目つきや桁外れの動体視力はまさに野生の動物。科学と野生が融合したとも言うべきであろうか。

一方佐伯は既に限界を迎えていた。

いや、寧ろ彼のような初心者が鷹村の放つプレッシャーの元で3ラウンドも耐えられたこと自体が健闘したとも言えるべきであろうか。

「こんにちは、木村さん」

「よお、一歩か」

「あ。あの方が木村さんが言っていた方ですか——つて、いきなりスパーリング!? しかも鷹村さん?!」

「アツハツハ、大丈夫だって。鷹村さんが一切手を出さないっていう条件付きのスパーだからさ。こちらとしても安心して見れるぜ」

「ほ、本当ですか……?」

「ま、まあ、今回に限っては大丈夫だろう……多分」

佐伯はただ我武者羅に拳を打ち続けていた。

既に両腕は鉛が乗ったように重く、足は思う方向へと進まない。そして目の前には鷹村という真の強者が待ち構えている。不敵な笑みを浮かべながら。

3ラウンドも残り僅か。

残り1ラウンド。

しかし残りの1ラウンド、果たして自分は動けるのであろうか、と佐伯は考える。

いや、無理に違いない。今でさえも立つことさえままならないほど息を荒らげているのに。

それならば――

それならば鷹村さんに――

そして第4ラウンドへと続く。

Round 5 New Challenger!

3ラウンド終了後、佐伯は自分のコーナに戻らず、鷹村の元へと歩み寄った。木村や一步は、あまりにも疲れが溜まり正常な判断を下すことが出来なくなると心配したが、どうやら違っていたようだ。

「……鷹村さん」

「おろ？ おいおいお前のコーナは逆だぞ、逆」

「……お願いがあります」

「お願いだと？」

「最後の4ラウンド目、鷹村さんが俺を殴らないという条件をなかつた事にして欲しいんです」

「お、おう……？」

佐伯の予想外の発言は鴨川ジムの皆を驚かせた。

疲れ切った上に、自分を殴ってくれなんていう奴はないのだ。普通は。言うなればそれは自殺行為に等しいのだ。

しかし鷹村は何食わぬ顔で提案を受け入れた。

目は口ほどに物を言う。

経験の浅い佐伯とのスパarringで鷹村は彼の考えている事がなんとなくだが分かったのだ。

拳は語るのだ。

「いやいやいや、鷹村さん！流石にそれはまずいっすよ！」

「そうですよ鷹村さん！あの方は初心者ですよ！？鷹村さんの本気のパンチなんて喰らったらひとたまりもありませんよ！」

木村、一步は鷹村を止めにかかるが、当の本人である佐伯の目は鷹村をじつと捉え、両の拳を目の前で構えている。

「ま、本人たつての願いつて訳だ。それを無視するわけにはいかねえよな」

「で、でも——」と鷹村の返答に一步が何かを言いかけたが、微かな声で「お願いします」とう佐伯の声にスパarringを続行させる他なかった。

そして4ラウンド目を告げるゴングが鳴り響いた。

「それなら……遠慮なくいかせてもらうぜ——」

ゴングが鳴ったと同時に鷹村は三メートル弱あつたはずの距離を一瞬でゼロにした。

と、同時に佐伯の腹部に激しい痛みが襲い掛かる。

「カハッ——」

鷹村の左ストレートが佐伯の腹部を突き刺した。

耐え難い痛み顔に顔を歪ませるが、佐伯は耐えた。そして次の攻撃に備え、バックステップで鷹村との距離とった。

「こ、これが本物のボクサーのパンチってやつか……」

「まだ序の口だけ」

まるでボクシングの教本そのものと対峙しているかのようなようであった。間合いのとり方、基本的なパンチの応酬に、熟練の技術が必要とする高難易度のテクニクに佐伯は圧倒された。

流石の木村や一步は止めに入ろうと試みたが、佐伯の目はまだ闘えると2人に訴えかける。

まだ俺はやれるんだ、と。

「やるじゃねえか。まあ、これでしまいだ——」

鷹村の猛攻が刹那だが止まる。

佐伯は安堵した。

しかしそれはほんの一瞬に過ぎなかった。

鷹村はサイドステップで佐伯の死角に入り込み、こめかみ目掛けフックを放つ。それも完璧なタイミングでかつ、絶妙な力加減で。

流石の鷹村も、人体の急所を本気で殴るような真似はしないのだ。しかも素人相手に。まあ、こめかみは人体の急所のうちの一つであるのだが……でも今はそんなことはどうでもいいんだ。重要なことじゃない。

品定めとまではいかないが、鷹村的に佐伯はよくやった方だ。そこらの素人なら4ラウンドを迎える前に、バテているのが常だ。例えそれなりの体力があつたとしても、リングに上がるとあつてないようなものなのだ。

実際佐伯もぼてているが、鷹村が認めたものはその心意気であろう。

拳をリングに付け、蹲る佐伯。

鷹村は踵を返し、自分のコーナーへと戻った。

「ま、トーションローとしちゃあ、良くやった方………？」

鷹村はピタリと歩みを止める。

周囲の反応が、どこかおかしいのだ。

鷹村は、まさか——、と思ひ振り返ると、リング上えダウンしていた筈の佐伯が立ち上がった。ちがっていた。

生まれたての子鹿のように足を震わせ、辛うじてだが立ち上がっているのだ。そして

自分の足をボクシンググローブで殴りつけ、意識を繋ぎ止めるように己を鼓舞しているようにもみえる。

確かアイツも——

鷹村ちらりと一步の方を見る。

佐伯はハードパンチャーでもない。そして、誰かさん並の桁外れの力がある訳でもない。が、何故だろう。鷹村は佐伯と一步を照らし合わせていた。

「木村も厄介なやつを拾ってきやつがつて。つたく……。おい！まだやれるんだらうな？」

「は、はい……。やれ……。ます……。！」

佐伯はファイテングポーズをとる。

まだ、自分は闘いたいのだ、と言いたげに。

「はあ……。降参……。はするはずないか。それなら人思いに一発で沈めてやらあ！」
「お願いします——」

鷹村の射程距離に佐伯が入るまで僅かコンマ数零秒り佐伯が鷹村の右拳を捉える頃にはもう全てがあまりにも遅すぎたのだ。

しかし、次の瞬間、鷹村の想像をはるか斜めをいく出来事が起きる。

「や、やりやがった佐伯の野郎——」と思わず言葉をもらす木村と、対照的にジム

のメンバー達や一步はただただ目を見開き、啞然としていた。

「つ……突っ込んできやがっただど!」

佐伯は鷹村の右ストレートに自ら突っ込むという、玉砕覚悟の決死の捨て身技を繰り出したのだ。

基本的にパンチは目標に到達するその瞬間が、最も速度がある。そして物理的に考えるなら、速度を持つ拳という物質は、速度があればあるほど威力を発揮するのだ。

故に佐伯の行動は決して間違つたものでなく、寧ろある観点からすれば理にかなつてゐる。しかしボクサー生命を考へるならば、その様な馬鹿げた行動は単なる自殺行為にほかならない。

また、自らパンチに突っ込むことは精神的に非常に恐ろしいことなのだ。人間の構造にても、反射的によけてしまうのが人間の常なのだ。

そして4ラウンド目にして、初めて佐伯は鷹村の身体に己の拳を付けることが出来た。ただ、拳をトン、と鷹村の腹部に当てる。ただ、拳を当てた、それだけである。

「や……つた——」

佐伯は満足したのであろうか、膝を付き、天井を仰いだと同時にリング上に倒れ込んだ。

「——イテテ……俺は……あれ、確かリング上に——」

「おお、目覚ましたか、佐伯！大丈夫か!？」

「あ、木村さん。あのう、あの後は一体どうなったんですか？後半あまり記憶がなくて……その、断片的といえますか」

「膝付いて、リングでダウンしたんだよ。鷹村さんにパンチ当ててからな」

ああ、そうか。と佐伯は思い出す。

「あの、……俺は……その」

「ん？」

佐伯からある言葉が零れでる直前、鷹村が佐伯の前に急に現れ、右手に持っていたスポーツドリンクを佐伯に投げ渡した。

「あ、ありがとうございます」

「それにしてもよく俺様のストレートに突っ込んできやがったな。あれには俺も引いた

「ぜ、まじで」

「す、すいません……」

「……が、嫌いじゃないな。その心意気は」

「——!!」

「明日も来るんだろ？」

「え、いいんですか!？」

「と、とにかく今日はとっとと帰って寝やがれ!」と言い残し、鷹村はロードワークをしながら、ジムから飛び出て行った。

佐伯は喜んだ。

少なくとも鷹村の評価的に、自分はボクサーを目指してもよいのだということに喜んだのだ。

たったそれだけなのかもしれない。

けれど、佐伯にとっては人生を変えた瞬間なのであった。

「——ということ、次は明日だな」

「はい！お願いします！」

「今日は帰ってゆつくり寝とけよ。モロに鷹村さんのパンチくらったんだからな」

空気がいつもよりも澄み渡っていた。

心なしか、気分が良い。

心のモヤが晴れたような、そんな気分だ。

けれど、やはり目の前が時たま歪むのは鷹村さんの強烈な一撃のせいなのかもしれない。まあ、突っ込んでいったのは自分なのであるが……。

「正直、まだちよつとだけグワングワンするような気が……」

「やっぱり、今日は送っていくわ。なんかあつたら危ねーしな」

「本当何から何まで……」

「あ、そうだ。腹減ってねえか。今から中華でも食いにいこうぜ」

「お願いします！」

ここに新たな挑戦者が誕生した。

佐伯は手を差し伸べた。

過去ばかり振り返る自分自身に。

共に歩もうではないか、と。
未来を変えべく、力を合わせようと。

Round 6 ファイトスタイル

佐伯がジムに入会してから二週間が経過した。

まだ完全には慣れていないものの、練習はある程度こなせるようになった。ロードワークはまだまだであるが、駆け出しのボクサーとしてはそれなりに走ることが出来る程度にまで成長した。

さて、ボクサーには2種類存在する。

インフアイターとアウトボクサーである。

前者は、恐怖をもものともせず自ら前へ前へと進み相手を打ち負かす。後者は、相手との距離をおき、まるで輪舞曲を踊るかのごとく華麗に相手を射止めるのだ。

どちらにも一長一短あり、どれが優れてるとか、劣っているなどと決めることは不可能である。

当の本人である佐伯は悩んでいたのである。

要はボクサーとしての初めての分岐点に打ち当たったわけだ。

「うーん……」

木村はアウトボクサーで、青木や一步はインファイターである。そして鷹村という怪物はインファイターでもありアウトボクサーでもある。

鷹村は例外として、体型的にもやはり佐伯が目指すべきはアウトボクサーなのである。けれど、彼はインファイターを所望しているのだ。

佐伯なりの考えでは、アウトボクサーは技術、そしてインファイターは根性、だ。

インファイターか。

それともアウトボクサーか。

悩みに悩み、彼が出した結論とは――

「木村さんに一步さん、あ、青木さんも。質問があるんですけど、アウトボクサーとインファイターの丁度間くらいのボクサースタイルってのはないんですか？」

3人とももの返答が「は？」である。

身近な例を上げれば、これには鷹村が確当するのであろうが、彼は例外である。卓越した技術に常人離れた能力がそれを可能にしているのであり、並の人間にはまず真似できません。

「それなら……あれだな、スイッチヒッターってやつだな」

「スイッチヒッター……ですか」

「というか、本当に別の意味でのスイッチヒッターってやつだな」

スイッチヒッターとは、構えを試合中に高頻度でコロコロと変える選手のことを指す。

基本は右構えか左構えかの1つで、各自各々は1つの構えの純度を高めていくことが普通である。

またスイッチヒッターの利点は、頻繁に右左と構えを変えることで、相手が距離感を測ることが難しくなるといふ所にある。しかしスイッチヒッターとはそれなりに器用な人間でなければ出来ないものなのだ。

さて、ここでいうスイッチヒッターとは、構えを変えることでなく、闘い方そのものを変える選手のことを佐伯は質問しているのだ。

「とうか、ボクサーファイターじゃねえのか？」と青木が呟いた。

「ボクサーファイターですか？」

「簡単に言えば鷹村さんがボクサーファイターさ。そして青木と一歩がインファイター

——つまりファイター。そして俺がアウトボクサー——つまりボクサーさ」

「ボクサーファイターか……」

「でもボクサーファイターはなかなか難しいぜ」

「うーん……」

早期に自身のボクサー象を作り上げることが、非常に有効な手立てである。勉強にしろ何にしろ、目標が無ければモチベーションも変わるのだ。

佐伯はある意味自分を俯瞰できる。故に、佐伯はインフアイター向きである。勇猛果敢に攻め、相手の懐に入り込み、殴り合う。このスタイルが向いてる。また、相当な精神力が、インフアイターを際立たせる。

が、当の本人は鷹村のスタイルをどうしても模倣したいらしい。

「気持ちに分かるけどな」と、木村が肩をポンと叩く。「あの人は俺たちの憧れでもあるからよ」と青木も呟いた。

「まあ、まだそんな悩むことはないさ。とりあえず全部試してみたらいいんだ。それから決めるのもありだろ?」

「確かに……木村さんの言う通りですね」

ほら、とギアとグローブが飛んできた。

「とりあえず練習がてら付き合ってやるよ」

「ありがとうございます!」

リングで対峙するは、木村。しかし今回は己のファイトスタイルを見極める為のものであり、試合形式ではないのだ。

佐伯は見よう見まねではあるが、木村の構えを思い出し、半身になり、ステップを刻

む。少し膝を曲げ、常に動作出来るような戦闘体勢に入った。

「じゃ、行くぜ！」

木村が放つ軽めのジャブは空を切る。大振りに身体を揺らし、全てのパンチを避けるぞ、という意気込みは伝わるが、木村はニヤリとしていた。

ステップを刻み、大振りに避け続けることは、かなりの体力を消耗する。初心者佐伯が2分も持つはずもなかった。

木村の右手ストレートが顔面にクリーンヒットしたところで、佐伯はスリップし、リングにしりもちをつく。

「し、これほどまでにしんどいのか……」

肩で息をする佐伯を横目に、木村は人差し指を振り、ノンノンノンと。

「無尽蔵の体力があったとしても、その闘いかたじや肝心な時に手が出せねえよ。あれだな。動作は最小限に抑えるのがポイントってやつよ」

「……といいますと？」

「まあ、見てなつて。青木！ちよつと手伝ってくれよ」

「あいよ」

木村の講義がスタートした。

まずは、ステップを小刻みに。しかし無駄がないように注意する。行動全てに意味を

持たせるのさ。例えば、肩を動かす時は、フェイントを織り交ぜたりとかよ。

ま、ただ適当に半身になってステップを刻むのは誰でも出来る。ただ、ここが難しいんだが、相手の肩や立ち位置を見て、感じるんだ。そうすればどのタイミングで相手が仕掛けて来るかが分かるのさ。ただ、ここらへんは実践あるのみさ。勿論中には、信じたくねえが天才もいるが、まあ、滅多に出会わねえから安心しな。

ゴングが鳴り響く。

「なるほどなあ」

「さて、次はインファイターだな」

「お願いしますー！」

グローブ構え、一歩のような構えをとる佐伯。左右に身体を揺らし、ジリジリと木村との距離を詰める。

刹那、佐伯の拳が木村を襲うが、それはどれも空を切ってしまう。右ストレートはテイクバックで避けられ、軽めのカウンターをもらい、左フックでは、合わせて放たれた左フックのカウンターを見事に食らってしまう。

しかし佐伯は諦めず勇猛果敢に攻め続けた。

「……なるほど」と、木村は考える。やはり——やはり、佐伯はインファイター向きか、と。

ゴングが鳴り響き、スパarringが終了した。

「やっぱり……」

「やっぱり……?」

「佐伯はインファイター向きだな」

「……確かに、アウトボクサーは向いてないとは思ってましたけど。インファイターか……」

「不満か?」

「いや、その、何といいですか、合ってるなど。自分に」

何となくであるが、佐伯は自分がインファイターであるな、と感じていた。ただ、自分には優れた武器があるわけではない。特に鴨川ジムでは、同じフェザー級で期待の新人である幕之内一步の存在が、あまりにも大きいのだ。

ハードパンチャー。自身の拳の皮がめくれるほどの威力のあるパンチを放つことが出来る特異な能力。加えて幕之内一步という人間には、家業で鍛えた凄まじい筋肉に加え、無尽蔵の体力が内蔵されている。

自分との格差があまりにも歴然としすぎているのだが、ここでくると最早笑うしかない。

「よくよく考えたら本当に、一步さんは強いな……。つーかヤベエ」

「まあ、一步はヤベエな」と、木村と青木が口を揃えて頷いた。スパarringの練習によく付き合うので、フックがテンプルに入ると視界が歪み、拳が鳩尾辺りなんか突き刺さった暁には、ゲボえを撒き散らすだけの機械になってしまう。

「ファイトスタイル……か。自分にあつたインファ이터の……」

不安を潰す様に、拳をぎゅつと握り締める。

こんなことは前にもあつたのだ。もう、上を見て自分にうんざりする事にも慣れてしまった。自分を卑下することも、勝手に自分の価値を決めてしまうことも、結局は自分が自分を信じていないからではないのか。

「やるしかないか……」

「ま、やるしかねえよな」

「木村さん」

「ん？」

「もう一回スパarringの相手して貰えませんかね。今度もまたインファイトでいきま
すんで」

「おうよ！」

Round 7 必殺技

ファイトスタイルが決まってから、佐伯の闘いには、安定感が増した。佐伯は基礎を忠実にこなすタイプの人間なので、鷹村を始め、木村や青木もその成長速度には驚くばかりであった。ちなみに最近の佐伯のあだ名は『教本』である。

「それにしてもすげえ上達ぶりだな」

「いやいや、そんなこと……」

「佐伯も新人戦に参加決定だな」

「まじですか」

「まじまじ」

新人王戦——一歩達にとっては、実に懐かしい響きである。去年の冬、幕之内一歩は宿敵である真柴を倒し、フェザー級東日本新人王として、有終の美を飾った。

そして、迫るは西日本王者との試合。つまり日本フェザー級新人戦のチャンピオンを決める試合が刻々と迫っていた。

佐伯はふと思いついた。対戦相手の千堂のスマッシュには気を付けろと、会長が口を酸っぱくして何度も何度も一歩に言い聞かせていた事を。

スマッシュとは、カナダのドノバン・レーザー・ラドックという選手が使っていた、フックとアッパーの中間のパンチのことである。

千堂武士は、幕之内一步に引けを取らない程の強打者であり、不良上がりということもあり、拳闘——つまり、ボクシングのセンスもさることながら、類まれなる能力の持ち主でもあった。

本来スマッシュとは、そこまでの威力はない。そもそも、打ち方がなかなか難しいのだ。並のファイターでは、フィニッシュブローとなり得ないものを、千堂は自らものにしたのだ。つまり、それは千堂がかなりの強打者であるということを再認識させることに他ならない。

斜めから突き上げるスマッシュ。鋭利な一撃を食らった対戦相手は皆、身体を宙に浮かばせていた。

「それにしても、あれなんですかね。他の人は全員自分のフィニッシュブローってやつを持っていてるもんなんですか？」

「まあ、大体はな」と木村と青木は口を揃えたが、奥の方から鷹村がニユつと顔を出し一言、

「ま、俺様レベルになると、種類関係なしに全てがフィニッシュブローだけだな」と得意げな顔で言うが、実際そうなんだからタチが悪い。

「そう焦るな。まだオメーは素人に毛が生えたような実力しかねーんだ。今はただ黙々とトレーニングをこなすしかねーよ」

「確かに。鷹村さんの言う通りやな…」

「ま、どっかの2人よりかは少なくとも能力はあるだろうから、気楽に頑張れや」と、この一言を皮切りに、青木木村がキレ、逆に鷹村に逆襲され、会長が怒鳴り散らし、逃げるようにロードワークを行う一連の流れは最早様式美と言つても過言ではないだろう。

「そういうえば、拳の調子はどうですか?」

実は東日本新人王決勝で、一步は拳に怪我を負つてしまつていたのだ。未だに完治はしないものの、こここの所はひたすらロードワークを行い、鬼のような基礎トレーニングをこなしていた。

「ちよつとまだ痛みます。ただ、前よりかは随分とマシになりました」

「おお、それはよかったです。その時の試合この間拝見させて頂きました。いや、まさか怪我した方の拳で勝つなんて…」

去年の東日本新人王決勝戦。相手は間柴という男であった。スタイルは、確かアウトボクサーだったはずで、特筆すべきは彼がデトロイトスタイルを用いてたこと。つまり、ヒットマンスタイルだ。

右腕を顎辺りに構え、半身になり、左腕の甲を下に向け、脇腹辺りで構える独特なス

タイトル。そして、そこから放たれるスナップを効かせたジャブこそが真骨頂であろう、フリッカージャブだ。

さながら鎌をユラユラと揺らし、不敵な笑みを浮かべる死神であろうか、相手によっては、フリッカージャブだけで勝った試合もあるくらいの実力者である。

さて、そんな男と幕之内一步は闘ったのだ。

佐伯は試合のビデオを観、啞然としていた。

フリッカージャブを封じる一環として、一步は己の拳で相手の肘を狙い、それが功を奏し、見事優勝した訳だが、それが原因で拳に怪我を負っているのだ。

肘というものは、拳よりも硬い。相手の一撃を肘でガードするということは、ある意味攻防一体のものだ。肘を撃ったせいで、拳が壊れ、選手生命を絶たれた人もいるほど、肘というものはボクシングにおいて、それほど脅威的なものである。

それを幕之内一步という男は、自分の意思で、しかもフルパワーで実行していたのだ。さながら我慢比べともいえるべき試合。最終的には一步の拳が間柴の肘に勝利した訳だが、あの試合は観ているだけでもひやひやしてしまうのは、きっと自分だけでは無いだろう。

「お疲れ様でした」と一礼し、佐伯はジムを後にした。割と今日は早めに上がった佐伯は、その足で本屋に向かう。その後はお決まりのコースで図書館に。

佐伯は、少なくとも自分には能力が無いと考えている。あるのはせいぜい根性くらいだが、それも幕之内一步という男には劣ってしまುದらう、と。

それならば、彼は知識や基礎体力面で勝るしかない、と。ここんところは、ほぼ格闘技系の本しか読んでいなかった。どれもほとんどボクシング系の本である。雑誌に始まり、ボクシングに関する学術書等を図書館で探し、それを読む日々である。まさにバイトをしつつ、生活の殆どをボクシングに捧げる生活を送っているのだ。

「お、佐伯じゃねーか。ラッシャイ！」
「ウイッス！」

たまに晩飯を作るのが面倒な時は、青木のアルバイト先である中華屋に向かうことにしていた。青木の作る中華はこれまた意外な事に絶品で、割とハマっている佐伯である。また、ここに来れば大体は鴨川ジムの誰かしらと、仕事帰りのサラリーマンがいるのだが、今日は珍しく、お客は自分一人だけのようであった。

いつものようにラーメンチャーハンセットと餃子を注文する。余談であるが、青木がオマケしてくれるので、足繁く通う佐伯である。

「フィニッシュブローか……」

「どうしたどうした。まーだそれで悩んでんのかよ」

「男なら、自分の必殺技！みたいなものに憧れるじゃないですか！」

「まあ、気持ちちは分かるがよ」

「そもそも、一步さんはハードパンチャーで、拳そのものが必殺技みたいですし、鷹村さんは存在そのものが必殺技じゃないですか」

「まあ、あの二人は特にやべーよな。本当一步には驚かされてばかりだぜ。まったくよ」
「早く俺にもフィニッシュブローが欲しいなあ」

「そこまでこだわる必要なんて、なくてもよくねえか？」

「うーん……。あればいいかなあ、的な」

「フィニッシュブローは確かに己の必殺技だけだよ、フィニッシュブローよりも厄介なものがあんだぜ」

「……え、まじですか!？」

「それは——」

「それは——?」

「闘志だな」

意外な返答に佐伯はキョトンとしていた。

それもそうだ。必殺技が闘志だなんて、まさかの返答に困る以外の選択肢があらうか。

青木は続ける。

「リングに立ちやあわかんだけだよ。確かにフィニッシュブローってやつは有るに越したあねえよな。それだけで相手を牽制できるし。けどよ、闘志ってやつは、それさえも超えちゃう時があるのよ。なんつーか目の奥の炎つつーか、燻りみてーなやつがよ。ただ、こればっかには実際に試合を試合をしてみねーと分かんねえよなあ。」

「…なるほど」

「まあ、つまりだ。必殺技ってのは、フィニッシュブローだけじゃなく、闘志とか、そこらへんもなるんじゃねーのかな？」